

協同学習を取り入れるためのプロセスモデルの開発

— 小学校での授業実践を対象として —

学籍番号 169974

氏名 岡田 育子

主指導教員 寺嶋 浩介

1.背景と目的

新学習指導要領で他者との関わりが必要とされている今日、多様な人と繋がりを持ちながら学ぶことが求められている。しかし、学校現場では、授業づくりだけが日々の業務でなく、校務分掌等の業務もあり、多忙に見舞われている。このような中でも単元という枠組みから授業の外観を把握し、また協同学習ではどんな力をつけたいのかを明らかにしてから授業に臨んでいくことが望まれる。本研究では、協同学習（特に小グループでの協同学習）を取り入れた単元設計を効果的にできるよう、プロセスモデル（協同学習を単元設計にどのような手順で取り入れていくかに関するモデル）の開発を目指すものとする。

2.協同学習について

「協働学習」という表記が、政策においては一般的であるが、一方で「協同学習」という文言も存在する。「協働学習」は坂本（2008）によると「第一に、他の組織や地域、異なる文化に属していたり…（中略）…多くの場合、教室外、さらには学校外の組織や地域、文化に目を向けることになるだろう」と言われており、「協同学習」は杉江（2011）によると「子どもが、主体的で自立的な学びの構え、確かで幅広い知識習得、仲間とともに課題解決に向かうことのできる対人技能、さらには、他者を尊重する民主的な態度、といった「学力」を効果的に身につけていくための基本的な考え方」と言われている。まずは教室内の学びを土台としていくことを考え、本研究では後述の「協同学習」を取り扱うこととする。

3.方法

本報告書では、まず第2章で実践当初の単元設計モデルを作成した。その流れに則り、協同学習の4つの目的（「意見や経験の交換」「共通課題の発見」「発見的な思考の促進」「深い理解への準備」）を組み込んだ授業を設計し実施した（第3章・第4章）。実践は、杉江（2011）の協同学習の工夫を参考にし、第3章では理科「電気のはたらき」（全10時間）、第4章では算数「整理のしかた」（全5時間）を実施した。理科では学習課題をつかむために「共通課題の発見」、実験結果の考察の時間で「深い理解への準備」を組み込んだ。第4章では全ての協同場面で「意見や経験の交換」を組み込み、これからの学習課題を把握するために「共通課題の発見」、整理することの便利さを理解していく場面で「深い理解への準備」を組み込んだ。そして実践の評価をし、単元設計の流れを改善した「単元設計プロセスモデル」を開発した（第5章）。

4.主な成果と課題

実践においては、第3章では、各班での役割の設定や、ワークシートの導入等で子ども全員が授業に参加し、各班で発言することが出来ていた。これらは班で活動を行う際には有効な手立てになり得ると考えられる。一方、課題として、筆者自身の教材研究の不足や、授業力の問題や、タイムマネジメントの仕方等、協同学習以前に授業を進める上で必要な事項において課題が残った。

第4章では、まずは自分で考える時間を持ったことで、子どもは自分の意見を持ってペア学習に挑むことはできた。しかし、筆者がペア学習という編成にこだわり、他の編成を視野に入れずに授業を進めてしまったために話し合いを活発化させることが出来ない場面もあった。また、タイムマネジメントに関して留意点に加えたにも関わらず、筆者の話す時間が長かったり、一つの授業に活動を入れ込みすぎてしまったりと時間を上手く使うことが出来ないという課題が残った。

以上の結果及び考察から、両実践に共通する問題として、タイムマネジメントの問題が挙げられ、その背景には教材研究の不足、協同学習の形式の課題が挙げられると考えられた。これらの課題を、研究当初立てた協同学習を取り入れたプロセスモデルに取り入れ、図1のような改善された協同学習を取り入れるためのプロセスモデルを開発することができた。

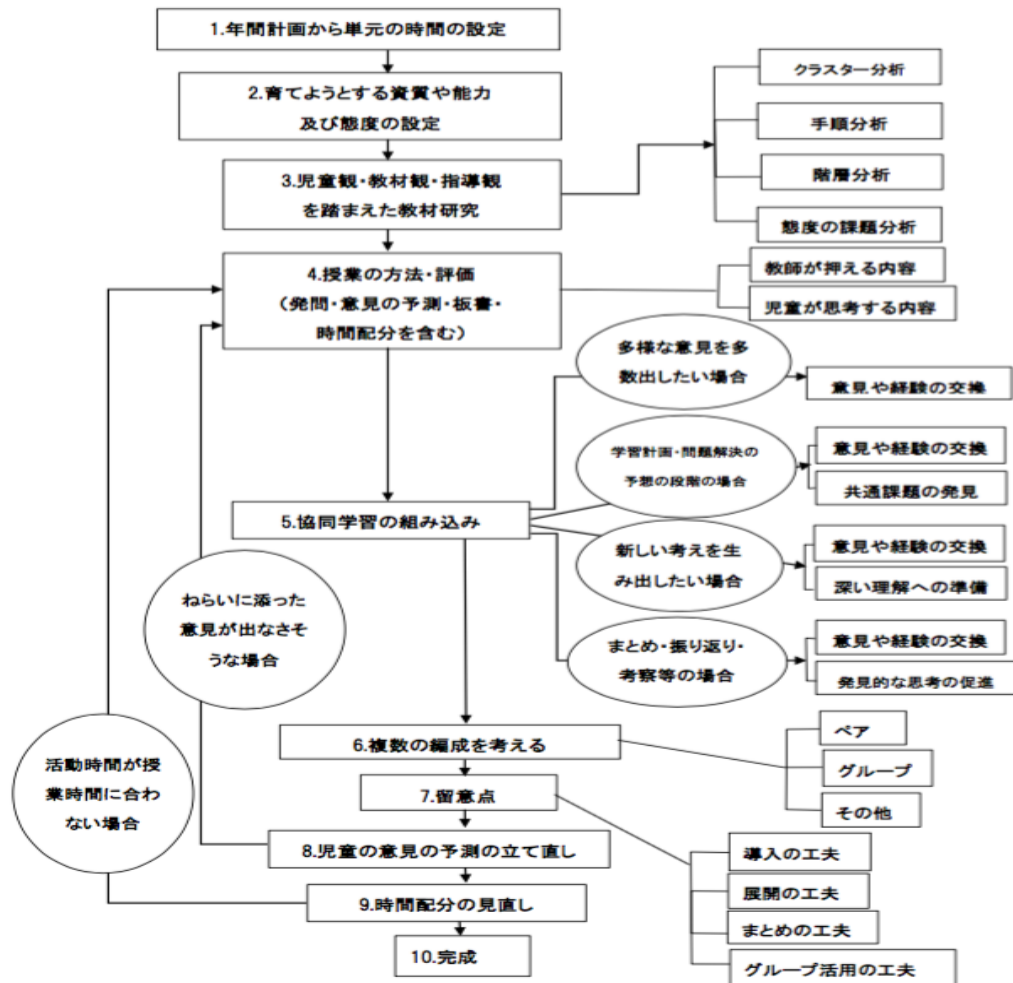


図1：単元設計プロセスモデル